

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「札幌市南区の国営滝野すずらん丘陵公園」の熊(U. arctos)騒動について

[I]公園での熊に関する事象を、門崎が保管する資料から、時経的に見ると

- ① 1978年公園の建設計画決定し、1983年、一部30haを公園として供用開始した。
- ② 1999年9月21日、日中体長約1.5mの熊1頭が園内を南北に移動するのをバスの運転手が目撃(詳細は不明)。10日間休園した。
- ③2001年夏に、熊除け金網(目幅約7cmで、地面から約3mの高さ)を、公園の南側全周囲と西側の過半数とに全長約3.8kmを、約1億9千万円掛けて設置した。
- ④2001年10月27日の朝日新聞に、「熊除けフェンス不十分の」批判記事がでる。
- ⑤2002年7月、東西・南北約2km・面積約400haの公園が完成。
- ⑥2003年、熊が金網を登り越えるのを防ぐ為に、門崎允昭の指導で、地面から約1.5mから上の金網に、上下約10cm間隔で、有刺鉄線(刺幅約7cm、若熊の手足横幅を9cmとして、刺が触れる間隔は7cmである)を張った。また、金網下端と地面との隙間には9mmの丸鋼を、約20cm間隔で、設置し、潜り入る熊の防止を図った。
- ⑦ 2005年9月26日に、公園の南東端の「清水沢口付近」で、熊の糞と足跡を発見、閉園した。29日に門崎が現地踏査した結果、同所付近で足横幅12.5cmの熊の足跡を、さらに野牛山登山道入口の西側の沢沿いで同熊の足跡を確認し園内には居ないことを確信し、翌日から開園した。沢地の金網下端の隙間を9mmの丸鋼で塞いだ部分が不備で、そこから侵入したものであった。
- ⑧2013年(道新9/27・朝日9/25 ヒグマの足跡発見、「すずらん公園で来園者6千人避難」)の記事----「札幌市南区の国営滝野すずらん丘陵公園で23日午後2時ごろ、園内を巡回していた職員が熊の足跡と糞を発見し、約6千人の来園者が避難した。同園は30日まで臨時閉園し、さらに2週間閉園し期間中のイベント中止も決めた」と言う内容。今回は民間の調査機関に依頼し、いつもの北大の熊研出の関係者(間野勉、坪田敏男)らが関与し、まだ熊が侵入した場所も、熊が園外に立ち去ったか否かも特定し得ていないとの園所長の話。11月19日の道新によると、その熊の足横幅は10cmとある。

[II] 熊から見た公園内外の環境

門崎は2001年から2007年までの7年間、公園内外の熊の土地利用実態について踏査した。

それを基に公園内外のその実態を述べる。

<園内>

①公園内は熊の生息地(熊が各四季ないし複数四季続けて使う地所)として不適であるが、柵が無ければ、時に出没地(時に短期に使う地所)となり得る環境である。不適な理由は園内には餌と成る植物動物が僅少過ぎることと、越冬穴の適地が無いことによる。

②園内には越冬穴が造られた形跡が全く無い。熊が越冬穴を造る場所は大昔から決まっている。

③母熊から5月から8月の間に自立させられた満1、2歳の若熊(自立するのは、子が1頭の場合は満1歳の、子が複数(2~3頭)の場合は満2歳の5月から8月の間である)である。

母から別れて、新たな生活圏を確立すべく森林(熊の基本的な生活地は森林である)を探索徘徊して(これは本能的な行動である)、公園外縁にきて、公園内が己が生活地として使って良い場所か否か、好奇心を起し、学習に入って来るのである。これまで、園内に入って来た熊は皆この種の熊である。そして、それを見極めるまで園内に居続ける。柵がある場合は、柵の間隙など侵入し得る場所を見つけ入って来る。己が生活し得る場所でないことを悟ると、出て行き、再び来る事は無い。「子熊」とは母が連れ歩いている子を言う。母から自立した年の熊は「若熊」と言う。熊の年齢は2月1日を誕生日として計算する。

④このような若熊は、人を襲う事は絶対に無いことを識って欲しい。根拠は私(門崎)が熊を研究始めた1970年以来、この種の熊による人身事故が皆無だからである。

満2歳代以下の若熊の体長は1.3m以下である。そして、足の横幅は13cm以下である。

<園外>

①園外側の南部全域と東側の南部過半は共に全域が熊の生息地ないし出没地(行動圏)である。

②園の南部外縁中程の沢沿いの湿地には、ザゼンソウS. renifoliusの群落があり、毎春熊がそれを採食に来ている。

[III] 2013年12月12日の道新の記事について

「滝野公園のヒグマの有無を確認するために、開発局は11月28、29日、12月5、6日に、約30人が園内を巡回しながら、花火の音や大声を出して反応を確かめた。足跡や冬眠用の穴なども見つからなかった。会議では、専門家から「調査の結果、園内で活動しているクマはいないだろう」という意見が上がり、営業再開できる環境が整ったとの結論になった。開発局は、再開後も1日2回の園内巡回を行う」との記事。

(門崎のコメント)

野生動物の調査の基本は、1人か2人で、静かに辺り総てに全神経を集中させて行うもの。花火や大声は言語同断の愚かな行為。熊が恐ろしくての為せる行為か。日頃から調査に専念していれば、微かな痕跡(通過跡、逗留痕、多様な形跡)も看取し得、その動物の心も解るもの。謙虚に勉強せよと言いたい。